
サヨナラ、私のアルルカン。

唯人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サヨナラ、私のアルルカン。

【Nコード】

N9849V

【作者名】

唯人

【あらすじ】

大学時代から付き合い合っていた彼の突然の死。

季節は巡り、再び春が訪れた。

市街地の外れ。花見の名所として地元では有名な公園の片隅にある一本の桜の木。老木は痩せた枝から小さな花を二、三輪咲かせているだけだ。

私は老木の幹に背中を預けた。公園には大勢の花見客が訪れているが、この木を愛でる人間はいない。大きく深呼吸をすると空を見上げた。枝の隙間から覗く、透き通る青い空。子供たちの歓声。髪を揺らす柔らかな風、甘い花の香り。

春の日差しに手をかざし、ゆっくりと目を閉じた。

最後にこの公園を訪れたのは、丁度三年前、彼との初デートの日だった。人混みを避け、この木の下に二人腰を下ろし、寄り添いあった。

当時大学生だった彼と私はバイトに卒論、就職活動と互いに忙しい日々が続いたが、順調に交際は続いていた。

そう、私が妊娠したと判るまでは。

小さな企業とはいえ、既に内定を貰っていた私は大いにうろたえた。勿論彼のことは愛していたし、近い将来私たちは結婚するのだと信じて疑わなかった。

だが、何時まで経っても彼の就職先は決まらなかった。それどころか、予想もしなかった言葉を告げた。

「パフォーマーになろうと思うんだ」

「えっ？」

「っていうか、どっちかって言うとか大道芸人に近いかな」

昼下がりのハンバーガーショップで、子供の様な笑顔を浮かべてコーラを飲む彼を、私は珍しい動物を見るかのようにまじまじと見つめた。

「初めは収入も少ないだろうけど、バイトもちゃんと続けるし、家事も出来るだけ協力するから安心して産んだらいいよ」

「正気なの？」

「俺がこの場に及んでそんな冗談を言う人間だと思う？」

屈託のない笑顔が、余計に腹立たしく感じさせた。

「ふざけないで！」

思わずテーブルを拳で叩いた。周りの客の視線が一斉にこちらに向けられる。

「あっ……」

両手で顔を覆った。怒りよりも、情けなさが先に立った。いつもそうだった。

裏表のない人の良さ。少年のように真直ぐな瞳。何処か危うさを感じさせながらも、それはまた彼の最大の魅力でもあった。

だが結婚は違う。ましてこの身体の中には新しい命が宿っている。

「ふざけてなんかいないよ」

彼はテーブル越しに手を伸ばし、長い指先で私の頭を撫でた。

「ただ、お前に嘘を吐く気は無いだけだから」

指の感触がいやに空々しく感じた。

「そんなのいい訳よ。ただの詭弁にしか聞こえないわ」

「詭弁？ どういう意味……」

「もういいわ！」

紺色のスーツの私と、ジーンズに長袖のＴシャツ姿の彼。答えは初めから決まっていたのだ。

「さよなら」

空になった紙コップを握り潰すと、私はその場を立ち去った。

それから一週間後、自宅から数駅離れた産婦人科で中絶手術を受けた。

麻酔が充分抜けたことを確認すると、洗面所で髪形と服装を整えた。待合室では大きく突き出たお腹を抱えた妊婦たちが、午後の診

療が始まるのを待っている。

大丈夫。これで良かったんだ。そう言い聞かせながら表に出た。外は冷たい雨が降っている。折畳みの傘を広げ、タクシー乗り場に向かおうとした時、ふと道路の向こうを見た。

雨に打たれ、身体を震わせている彼の姿があった。少し伸びた髪が額に張り付き、お気に入りの水色のセーターはその色を変えている。

私の姿に気付き、手を上げた彼を無視してタクシーに乗り込んだ。これで終わりよ。

そう呟き、後部座席に深く身体を沈めた。

車の窓ガラスを叩く雨が激しくなっていた。

体調は順調に戻り、二週間目には出血も止まった。私は日常を取り戻していた。

数週間前の私と異なるのは、彼と彼の間に出来た小さな命を失ったということだけ。だがそれも漫然とした日々の繰り返しの中、記憶の淵に埋もれていった。

後悔は無かった。

街の風景がすっかりと春めいた頃、久しぶりに彼からのメールが届いた。

久しぶりに、といえば嘘になる。この二、三カ月、彼から何度も電話が入っていたが、受話器を取る事は無かった。メールが届いても碌に読むこともなく削除した。この日に限って取り敢えず読んでみよう、と思ったのは、ただの気まぐれでしかない。

『君の気持を何一つ解ってあげられなくて、ゴメン。こんな中途半端な僕じゃ君に捨てられても仕方がないと、今更実感しています。思い起こせば、付き合い始めた頃から、僕はすっかり者の君に甘えてばかりいました。その上子供も出来て、君はどれだけ不安だったのだろう、どれだけ辛い思いをさせてしまったのだろうと、僕なり

に考えました。でも、どれだけ謝っても僕を許してくれる事は無いでしょう。だけどこれだけは知っていて欲しい。僕は本当に君の事が好きだった。子供が出来たと聞いて、嬉しい、と単純に思った。何を言っても君はいい訳だと思っただろうけど、それだけは信用してところで、来週の週末、以前二人で行った公園で仲間たちと一緒にパフォーマンスショーをすることになりました。もし僕をまだ少しでも好きだと思ってくれているなら、見に来てくれませんか」

「どうしてこんなに馬鹿なのよ」

携帯を持つ手が震え、全身の力が抜けていくのを感じた。

結局、彼の『パフォーマンスショー』なるものに行くことは無かった。気にならなかった訳ではないが、当日は就職先で新人歓迎会が行われることになったからだ。

もし彼から「どうして来てくれなかったんだ」と言われても、弁解のしようは幾らでもある。彼に会わずに済んだ事を、何処かで私はホッとしていた。

歓迎会は地元の居酒屋で行われた。社長と新入社員の私を含めても三十人程の小さな会社のせい、上司や先輩たちとも話が盛り上がり、普段は飲まない酒もすすんだ。

十一時を回り、宴もたけなわ、といったところで化粧直しをするため洗面所に向かった。鞆の中の化粧ポーチを探していると、携帯電話の着信ランプが光っていたのに気付いた。発信元に母親の名前もある。

時間も時間だし、きっと一人娘の私を心配してくれているのだろう、と折り返し電話を掛けた。

「あ、お母さん？ 遅くなってごめん。もうすぐお開きになるから

……」

『あんだ、何も聞いてないの？』

母親の声は明らかに動揺していた。

「え。何のこと？」

『あんたの彼氏の事だよ』

母には彼と疎遠になっている事は言っていなかった。学生時代から付き合っていた彼の事は両親も知っていたが、ずっと会っていない理由を説明するのが怖かったからだ。

「彼に何かあったの？」

『トラックの事故に巻き込まれて病院に担ぎ込まれた、ってあちらの御両親から連絡があったんだよ』

「そんな……」

慌てて着信履歴を確認する。母親からの前に、二人の仲を知る友人たちから何度も電話がかかっていた。

「彼は今何処の病院に居るの」

やや間があつて、母の深呼吸が聞こえた。

『しっかり聞きなさい。いいね？』

「ええ、大丈夫よ」

『K救急病院に運ばれたけど、もう手遅れだったらしいよ。……死亡が確認されたって……』

「死亡？ それってどういう事？」

洗面所の大きな鏡に映る私の顔は、何処か歪んで見えた。

『明日がお通夜らしいから』

「それでいつ退院出来るの？」

声にならない声が喉に絡みつく。

『あんなにいい子だったのに……。母さんも父さんも、あの子だったから安心してお前を任せていたのにねえ』

鼻を吸る母親。

『聞こえてるの？　しっかりしなさ……。』

手の中の携帯電話が滑り落ちた。同時に私の視界もバランスを失った。

彼が亡くなってから数ヶ月が経ち、秋の気配が深まっていた。私は何度か彼の家を訪れ、遺影の前で手を合わせた。だがその度に感

じたのは、彼を失った悲しみや喪失感ではなく、遣る瀬無さだけだった。

二度と動くことのない、写真の中の笑顔。

彼はトラックの前に飛び出した幼い子供を庇って死んだ。だが、その子供も、結局死亡した。事故が原因ではない。彼が死んでから暫くして、公園の鉄棒から落下し、脳挫傷で亡くなったのだ。

本当に馬鹿なんだから――。

冬の足音が迫る頃、彼のパフォーマー仲間だったという青年たちから便りがあった。大道芸の宣伝らしい、安っぽい広告が封筒の中に入っていた。

そして広告の下には、ありきたりの、悔みの言葉が書き添えられていた。

――あの公園で、クリスマスイベントとしてパフォーマンスを披露します。本来なら、彼も自分たちの輪の中に入っていたはずです。あなたには辛い事かも知れませんが、彼の為にも頑張りますので、ぜひ見に来て下さい――

封筒の中には短い手紙が添えられていた。

見覚えのある、ハネが強く、右上がりの癖がある字。

彼が事故に遭った頃には、私たちは別れていたも同然だった。だが最後のメールの内容からいって、仲間たちには何も言っていなかったのだろう。それどころか、私の本心にも気付いていなかったに違いない。能天気な彼ならあり得そうな事だ。

「馬鹿ね」

手紙を何度も読み返す。

違う、私が彼に言いたいのとはそんな事じゃない。

「どうしてなのよ――」

手紙を握りしめ、ただ泣くことしか出来なかった。

ホワイトクリスマス、とは言えないが、その日の夜は何時雪が降

ってもおかしくないほど冷え込んでいた。

公園からは賑やかな音楽と歓声が聞こえる。

遠巻きにその様子を眺め、すぐにその場から立ち去った。

あの場所に、彼はいない。

老木から僅かに感じる温もり。そして春の日差し。ポケットから、彼からの最後の手紙を取り出した。

「大好きな君へ。次の春には、これまでのように笑顔で会えるかな。初めて二人でお弁当を食べたあの場所で待っていてもいいかな。もしかしたら、その頃には、君には違ういい男がいるかもしれない。でも、もし君がまだ一人なら、やっぱり会いたいと思う。君が来なくても、きつと僕は後悔しない。君が幸せなら、それでいい。僕は君の人生があoの時のように幸せな笑顔に包まれているなら、それが僕の幸せなんだ。今も、これから、君のことを好きでいてもいいかな」

拙い文章。でも彼の精一杯の心が詰まっている。

彼の名前を呼んだ。そして呟く。

「私も、あなたに会いたい……」

強い春風が吹き抜けた。舞い散る無数の花弁。視界が桜色に染まり、甘い匂いに噎せかえる。

——そんな馬鹿な。

「もういい加減、俺のことを馬鹿だ馬鹿だ、って言うのはやめてくれよ。これでも自覚はあるんだからさ」

ありきたりのメイクを施した、大きなピエロと、幼い子供のピエロ。

この声は、メイクの奥のあの瞳は……。

二人のピエロは私の目の前で、恭しくお辞儀をした。

「それでは、俺と俺の息子との、一世一代のパフォーマンスショーを始めます!」

ジャグリングにパントマイム、一輪車にイージーマジック。
色とりどりのシャボン玉と紙吹雪。そして降り注ぐ桜の花。私の
世界が鮮やかな色に溢れていく。

永遠とも一瞬ともつかぬ、夢のような時が流れて行った。

「それではこれが最後の見世物です」

二人のピエロが私に近づく。

小さなピエロが私の膝の上に乗った。幼い顔にメイクは施されて
はいない。ただ、子供らしい、無邪気な笑顔を向ける。

大きくて、少し垂れた目。ああ、その目は私に似ているかもしれ
ない。その一本眉は、広いおでこは彼に似ている。少しカール気味
の髪の毛は、彼のお父さん似かしら。

「ねえ、今、君は幸せだと思えた？」

跪く彼が囁く。お気に入りシャツと、私が以前誕生日に贈った
シルバーのブレスレット。

「あなたにはどういう風に見えるの？」

涙で声が震える。

「そうだな」

彼の手が頬に触れた。確かに、生きている人間の体温を感じる。

「君は幸せになれる。僕が保証する」

「そんな無責任なことばか——」

「ママ」

膝の上の子供が微笑む。そっと立ち上がると、私の頬に小さな唇
を寄せた。

「ママ、大好き。パパも大好き。本当だよ」

そう言う彼に駆け寄り、手を掴んだ。

「また会おうね、ママ」

もう一方の手でバイバイをする。

「そんな……」

ああ、私は何てことをしたのだろう。こんなに優しい、美しい日
常を、自分から捨ててしまったのだ。

「行かないで！」

思い切り叫んだ。

「私も連れて行って！」

子供の手を取る彼は、ゆっくり首を振った。

「言っただろう、君は幸せになれる。いつまでも、僕たちが君を見守っているから」

——何時までも、君を愛しているよ——

風がそう答えた気がした。

「お婆ちゃんってば！」

「ああ、お前か。どうしたんだい？」

「どうした、じゃないよ。ずいぶん探したんだぞ」

生意気盛りの孫が、腰に手を当て、私を見下ろしている。

「お義母さん、やはりここでしたのね」

息子の嫁が安心したように息を吐いた。

「それで、今年もいい夢が見れましたか？」

耳元で囁く。

「毎年の事ですものね」

悪戯っぽく笑う嫁の笑顔は、遠い日に知り合ったあの人を思い出させる。

「そうだね。お陰さまで、今年もいい夢を見たよ」

老木の根元から立ち上がり、春の日差しに目を細めた。

また春が来るまでサヨナラ。私だけのアルルカン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9849v/>

サヨナラ、私のアルルカン。

2011年8月30日03時36分発行